Phillippine Camp 2014

reported by FIWC kyushu

Time：2014/2/20～3/17

Place：BRGY Cansoso,Matag-ob,Leyte

＜目次＞

１、はじめに

２、FIWC 九州とは

３、重要人物

４、ワーク地・訪問地

５、活動日程

６、ワーク報告

７、生活状況

８、各係報告

９、他己紹介

１０、感想

1. 初めに

11 月 8 日、フィリピン中部を台風 30 号(アジア名：ハイエン、フィリピン名：ヨランダ)が襲った。写真で見る景色は自分の知っているフィリピンとは大きく違い、屋根は飛ばされ家が壊れ、電柱は折れ、あのたくさんの生き生きとしたココナッツは薙ぎ倒されていた。１度は計画していたキャンプを中止にし、他にできることを探そうとしていたが、Cash for work の形で計画通りのキャンプを行えることになった。すぐさまメンバーを集めて、キャンプに向けて私たちは再び動き出した。

そんな今回のキャンプテーマは

「明日～for smile of everyone～」

みんなで「明日」が「明るい日」になるようにしていく、皆が笑顔になれるキャンプにしていく。そういった思いが込められている。

笑顔っていうのは人から人へと移っていくものだと思う。私たちが笑うことで村人を笑顔にすることができるし、村人の笑顔によって私たちも笑顔になる。そんな風にして人と人は助け合って生きているのだと、今回のキャンプを通して感じた。私たちが村人と過ごした１ヵ月間、たくさんの笑顔がカンソソ村には咲いた。これからも、大好きな人たちのもとに１輪でも多くの笑顔が咲きますように。そして、台風 30 号の被害にあった人々のもとに、この笑顔が届きますように。

2014 年フィリピンキャンプリーダー　工藤星授

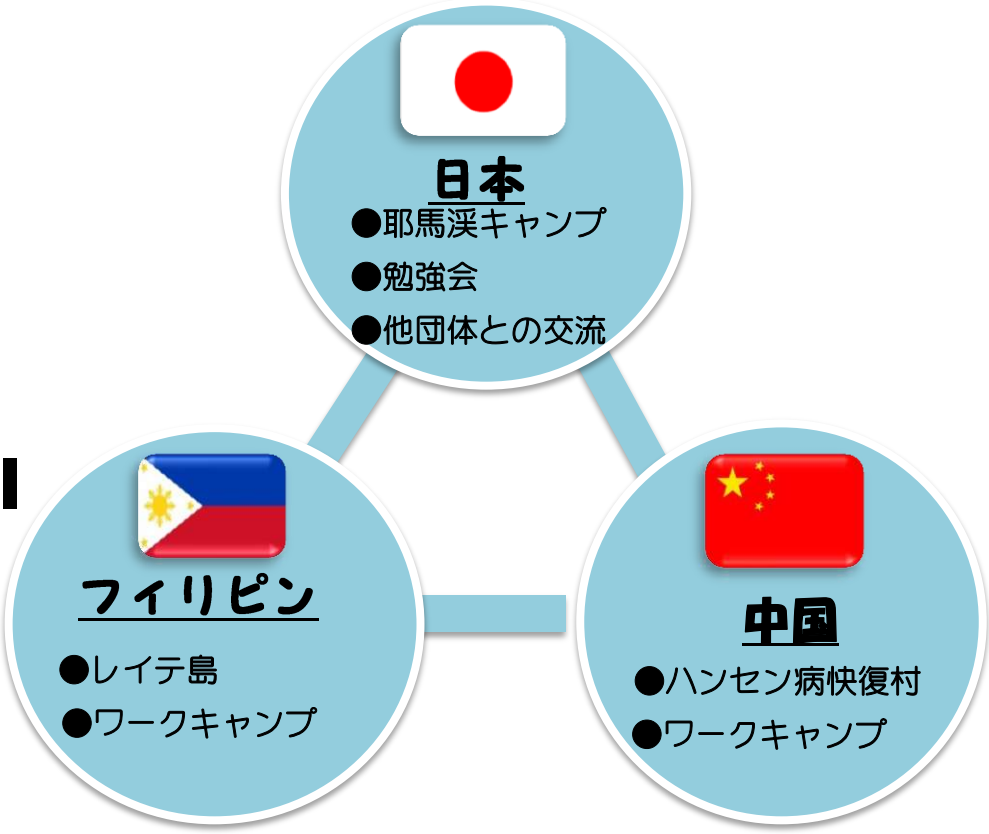
2. FIWCとは

Friends

International

Work

Camp



FIWC は九州（主に福岡）の大学生が主体となり学生のみで国内外で国際協力を行っている学生 NGO 団体です。

＜国際活動＞

●中国キャンプ

ハンセン病快復村へ行き、村人のケアやインフラ整備を中国の大学生と行う。

●フィリピンキャンプ

フィリピンレイテ島の貧困村を訪れインフラ整備を村人と共に行いながら交流を図る。

＜国内活動＞

●耶馬溪キャンプ

年 3 回大分県の耶馬溪で農業体験を行っている。

●FP（FIWC Party）

月1回第4土曜日に「びおとーぷ」で行っているワークショップ形式の勉強会。

他にも自由な発想で自由な活動を行っている柔軟さがFIWC九州の特徴です。また、FIWCは九州の他、関東、関西、東海、広島に支部があり、互いに情報交換を行いながらそれぞれが自立した活動を行っています。

☆キャンプメンバーだけでなく国内活動にも一緒に参加してくれる大学生を募集中！！

３．重要人物

現地エンジニア：ロクロクさん

1999 年から FIWC 関東のキャンプに参加してくださっている現地のエンジニア。FIWC 九州発足後は九州のプロジェクトのみに関わらずキャンプを様々な面から支えてくださっています。今回もほぼ毎日ワークのサポートをしてくださいましたが、ここ数年患っている病気が心配です。FIWC のメンバーを心から愛してくれている、私たちのフィリピンのお父さんです。

カンソソ村の村長：タタイコックス

今回のキャンプ地、カンソソ村の新カピタン(村長)。普段は物静かですが、お酒を飲むと陽気なおじさんに…。そんなタタイコックスは、夜遅くまでワークを手伝ってくれたり、その次の日も朝早く起きて手伝ってくれたりと、相当イケメンな村長でした。

ダディ・ドドン

2009 年のワーク時にお世話になり、それ以降も私たちの活動に協力してくださっているマタグオブ市の元副市長。下見キャンプ中は家にステイさせてもらったり、下見キャンプ終了後は資材の手配など大変お世話になりました。今回のキャンプでも、自分の仕事が忙しいにもかかわらず、資材をとても安く手配してくれワークの完成に大変貢献してくださいました。

カンソソ村の前村長：マミーセディン

現在のカピタンのお母さんで、下見期間中はマミーセディンがカピタンでした。今回のキャンプ中は毎日私たちのために、おいしいご飯を作ってくれました！普段は目を細めて笑っているけど、真剣な話のときの目は相変わらず怖かったです(笑)。

NorWeLeDePAI

(NorthWesterm Leyte Development Parent’s Association Inc.)

FIWC 九州と 2004 年から連携体制をとっている現地の NGO 団体。FIWC 関東とも協力している。この団体は、レイテ島北西部の村々で子供たちの両親が中心となってコミュニティの発展を目指す活動を行っており、世界的な NGO である World Vision のドイツ支部から資金援助を受けている。毎回、パスポート・貴重品の管理をお願いしているが、11 月の台風の影響で事務所の場所が移っており、あまり安全でないので預けない方がよいと言われたので今回は挨拶だけのために訪れた。

～ロクロクさんの寄付金について～

去年の下見キャンプ前にロクロクさんへの寄付金を集め、合計 46,000 円が集まり、そのうち 30,000 円を下見期間中に渡していたため、今回はその残りの 16,000 円を渡しました。ロクロクさんは相変わらず体調が悪そうで、合間合間に昼寝をしたり、冷えぴたをはったり、腰のマッサージをしたりしていました。また、排尿時に痛みがあるということでキャンプ中に一度病院にも行きました。薬の服用を現在も続けていて、仕事をしていないために安い薬を勧められたそうですが、効き目が弱いらしく、以前同様 1 日約 120 ペソする薬を服用しています。今回渡した寄付金で、集めた分は渡し終えました。ロクロクさんは何度も「ありがとう」といっていました。協力してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

４．ワーク地・訪問地

カンソソ村*(Cansoso)*

今回のワーク地。人口 700 人ほどの村でマタグオブ市の中心からバイクで 10 分ほどのところに位置する。主な産業はココナッツや稲作である。雨天時の通行者の安全の為、川の上にフットブリッジを作った。台風ハイエンの影響で今回は電気がまだ復旧していなかった。

サンドニシオ村*(Sandionesio)*

前回のワーク地。人口 400 人ほどの小さな村。カンソソ村からバイクで１０ 分ほどのところにある。前回のワークは川の上にまたがる道のコンクリート舗装だった。

マタグオブ市*(Matag-ob)*

フィリピン南東の島、レイテ島の西側に位置する田舎町。オルモックからバスで１時間半ほど。中心にはマーケットなど様々な店が立ち並んでいる。その一方で山間部に位置する村は水道や生活環境が整っていないことが多く、周辺の町と比べても最も貧しい市の１つである。FIWC 九州は過去数年この町でプロジェクトを行なっている。今では私たちの活動が浸透しつつあり、日本人への理解が深まっている。今回のプロジェクトは、市・村・FIWC の共同でのプロジェクトという形であった。

オルモック *(Ormoc)*

レイテ島西部で最も栄えている港町。町中には大きなスーパーマーケット、病院、銀行、郵便局など、必要なものはすべて揃っている。フェリー乗り場、バスターミナルもあり、オルモックからレイテ島の各町へバスが出ている。

セブ *(Cebu)*

フィリピン中部のビサヤ諸島にあるセブ島。マニラ首都圏に次ぐ大都市圏。毎回キャンプでは隣のマクタン島にあるマクタン・セブ国際空港から出入国し、最終日にはセブ港近くの SM という大きなデパートで買い物を楽しんでいる。

タクロバン *(Tacloban)*

レイテ島北東部の海岸にある港湾都市。タクロバンは東ビサヤ地方全体の商業、観光、教育、文化、そして政治の中心であり、海外貿易や大型船の出入りが盛んな港町かつ空の玄関口である。台風の被害が深刻ということで、一日だけ訪問した。

５．活動日程

●MTG スケジュール

1/22(水)　第１回 MTG＠あすみん

2/5(水)　第２回 MTG＠あすみん

2/8(土)　第３回 MTG＠那珂川別荘

～2/9(日)　国内合宿

2/12(水)　第４回 MTG＠あすみん

2/20(木)　先発出発

3/1(土)　後発出発

3/17(月)　帰国

3/19(水)　帰国後 MTG＠びおとーぷ

4/26(土)　報告会＠びおとーぷ

●キャンプスケジュール

日	月	火	水	木	金	土
				2/20 先発出発	21 カンソソ到着 資材買い出し	22 GAM宣伝
23 GAM （1）	24 ワーク① 表敬訪問	25 ワーク②	26 ワーク③	27 ワーク④	28 ワーク⑤	3/1 ワーク⑥ 後発出発
2 ぐっさん帰国 後発到着 Welcom Party	3 ワーク⑦	4 ワーク⑧	5 ワーク⑨	6 ワーク⑩	7 ワーク⑪ ホームステイ MTG	8 Japanese Festival ホームステイ開始
9 サンドニシオ訪問 (2)	10 ワーク⑫	11 ワーク⑬	12 ワーク⑭	13	14 タクロバン視察(3)	15 ワーク⑮ Farewell Party
16 村出発	17 帰国					

(1) GAM(General Assembly Meeting)…通称ジェネアセ。村人に私たちの活動について知ってもらい、承諾を得る場。

(2) サンドニシオ…前回のキャンプ地。キャンパー８人のうち、４人が訪問した。

(3) タクロバン…台風の被害が大きかった地域。現状を視察しに行った。

6. ワーク報告

●概要

場所：フィリピン共和国レイテ島マタグオブ市カンソソ村

内容：construction of concrete footbridge(歩行者用の橋の建設)

期間：2/24~3/15（15 日間）

参加者：FIWC 九州、村人、現地エンジニア

●ワーク詳細

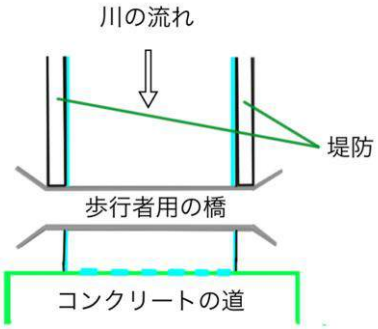
(1)ワーク地詳細

村	カンソソ	人口	725 人
問題点	村から市の中心に行くときに川があり、またその川の上に道があるが大雨の日は道が水でつかってしまう。そのため歩行者は通行できなくなる。また橋の奥側には学校があり、雨天時は通行が大変危険なので授業を中断して帰宅することもある。		
場所と交通手段	移動手段は主に車、バイク、徒歩。バスは通っていない。マーケットからバイクで 10 分程度。		
備考	この道はカンソソ以外にもマサバ村、サンドニシオ村の人々も利用する。 ワーク費は村が貧しいため、用意できない。		

(2)ワーク概要

今回のワークでは川にコンクリートの橋をかける。全長約 18m、幅約 120cm。はじめに川の両岸に支柱を立て、足場をつくり、橋の骨組みをバールで作り、コンクリートを流し込む。最後に手すりをつけた。FI が帰ってから足場の撤去、橋の入り口のコンクリート舗装を行う。また、洪水の時のために川の側面を石とコンクリートで壁を作り強化した。

上から見た図



○一日のスケジュール

8:00～11:00

- ワーク 午前の部

11:00～14:00

- 昼食&休憩

14:00～17:00

- ワーク 午後の部

基本的には月～金曜日にワークをして土日は休息日だったが、3/1 と 3/15 の土曜日は次に述べる Cash for Work の都合上ワークを行った。（以下参照）

●Cash for Work について

今回ワークを行う予定だったカンソソ村には、ココナッツ農家が大勢いる。今回の台風でココナッツが薙ぎ倒され、ココナッツからまた収入が得られるようになるまで早くても 2 年はかかる。そこで今回のワークは、参加してくれた村人にお金を払うことによって、ワークとして村の公共事業を行うとともに、村人が貰ったお金でこれからの仕事の資本金としたり、生活のために使うことができる。このような Cash for work の形でワークキャンプを行うことになった。

カンソソ村にはおよそ 185 世帯ある。そのうち村役員たちを抜いた 175 世帯（※村役員は給与なし）に三日間ずつ働いてもらうことになった。グループ分け（シフト）は三日ごとにカピタンにバヤニハン(ボランティア)のリストを作ってもらう。毎回 25 人（世帯）程度。毎朝出席をとり、1 日につき 400 ペソ、一世帯 3 日間で計 1200 ペソの収入が得られる。記録は全てペイロール(名簿)に記入。また私たちが給料として出せる金額は決まっているので、それを超える分は、私たちが帰った後に市がお金を払うことになった。

グループ A：24 人　2/24.25.26
グループ B：26 人　2/27.28. 3/1
グループ C：26 人　3/3.4.5
グループ D：28 人　3/6.7.10
グループ E：27 人　3/7.11.12
モニュメント作り：2 人 3/15

※ 3/1、3/15 は土曜日なので本来は休息日だが、シフトの都合上村人には働いてもらい、日本人も疲れていなければ働いた。

・給与
(グループ A～E(131 世帯))×(400 ペソ×３日)＝157200 ペソ
(モニュメント作り２人)×(400 ペソ×１日)＝800 ペソ
合計 158000 ペソ

※私たちの滞在中にワークをすることが出来なかった残りの 44 世帯については、私たちの帰国後に橋の未完成部分のワークをしてもらうことで給与を市から受け取るかたちとなっている。

●ワークの手順

①支柱作り
橋の支柱を作るために、４カ所に深さ２メートル程の穴を掘り、そこにバールを骨組みとして固定した後、小石とコンクリートを流し込んでいく。

②橋の土台＆骨組み作り
木材で足場となる土台を作る。また、橋の骨組みをバールで作った後ワイヤーで固定する。

③川の側面強化

洪水時などの川の側面の土砂崩れを防ぐため、橋付近の川の側面をシャベルで整えた後、そこに①同様小石とコンクリートを流し込む。

④通路をコンクリート化

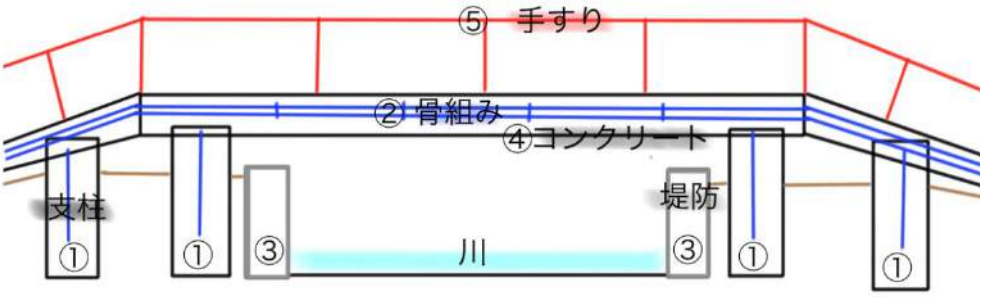
橋の骨組みにコンクリートを流し込む。（この時コンクリートが流れ出ないようにベニヤ板と木材で枠をあらかじめ作っておく）この作業は一日で終わらせた。

⑤橋の手すり作り＆色塗り

橋を安全に渡るために、ポールを溶接して手すりを作る。また、見映えを良くするために手すりをペンキで色塗りし、橋はほぼ完成。

この時点で FI が行ったワークは終了だが、残りの足場の木材の撤去と橋の入り口をコンクリートで滑らかにする作業については、FI が帰国した後、村人にしてもらうように伝えている。

橋を横から見た図



全体完成図

その他のワーク

今回毎日２５人前後の人が働くことになったが、途中人が多すぎてもやることがない、橋の骨組み作りなどはスキルワーカーしかできないなどの理由から、橋の建設と同時進行で他のワークも行った。これらのワークは緊急性はあったが、村が貧しくてワークする人を雇えない状況であったのでいい機会になったと思う。

★学校のフェンス作り

小学校のフェンスが壊れてなくなっており、プライバシーの面で問題があったので、フェンス作りを行った。材料には村に生えている竹と木をとってきて使った。最初に太い木をさしてそのあと竹を切ってフェンスを作る。学校の全体をフェンスで囲めたのでよかった。釘も学校が用意してくれたので資材費はゼロだった。

★学校の屋根の修理

台風で学校の屋根が壊れていて雨漏りする状態だった。これらの修理は技術がいるので私たちが直接ワークをすることはできなかったが、私たちのワーク期間中にやることになった。資材の木材とくぎは学校が購入。屋根は全て取り外してその写真を政府の教育機関に送ると、新しい屋根がもらえるということで、屋根代はお金がかからなかった。私たちは実際にはワークできなかったが屋根を運ぶ手伝いをした。

★学校への道のコンクリート舗装

フットブリッジに使った資材が余ったので、学校のコンクリート舗装を行った。校門から校舎までのコンクリートが滑りやすくなっていたので、上からコンクリート舗装を行い、また校門から学校の階段までに新しくコンクリートの道を約 10m 作った。

★電柱の穴掘り

台風の影響でカンソソ村はまだ電気が通っていなかったが、電気復旧の目途がたったので新しく電柱をたてる用意をすることになった。そこで、電柱の穴掘りをすることになり、私たちのワーク期間中に行うことになった。これも FI が直接ワークをすることはできなかったが、これで電気復旧ができるようになるので喜ばしいことだと思う。

★草刈りワーク

村のメインストリートの草刈りをした。これはワークに人が足りているときにナナイ達を中心に行った。刈った草は燃やし、かなり道がきれいになった。

★モニュメント作り

ワークの記念として橋のそばにモニュメントを作った。モニュメントの表にはキャンプテーマである「明日～for smile of everyone～」と「笑」の文字、裏にはキャンパーの名前、ロクロクさん、ダディドドンの名前を刻んだ。

●ワーク費の詳細

今回資材を二度買い足すことになり、ワーク費が足りなくなってしまったので足りなかった分を生活費から出すことになった。買い足した分はダディドドンのおかげで実際の半額以下の値段で入手できたのでよかった。

FIWC 予算

資材・ツール代	87,014 ペソ
感謝料	20,000 ペソ
給料代	158,000 ペソ
計	265,014 ペソ

ムニシパル予算

資材・ツール代　85,995 ペソ

ムニシパルはこれ以外にも、FI が帰った後の残りのワークの給料代を支払ってくれる。

予算の詳細

〇感謝料

ロクロクさんとダディドドンに今回の協力のお礼に感謝料を渡した。それぞれに

(協力してくれた日)×900 ペソ＋気持ち分を渡した。

〇給料代

先にも述べたように今回は cash for work を行ったので給料を支払った。もともとは 150,000 ペソを予定していたが、買うはずだった小石を自分たちで川からとってきたのでその分の 8,000 ペソを給料にまわした。

～村が出す費用について～

今回のワーク地であるカンソソ村は貧しかったので下見キャンプの時から予算は出せないということであった。その代わり、私たちの滞在中の毎日の食費を半分出してくれることになった。一人一日 100 ペソであったので半分の 50 ペソを出してくれた。

●総括

今回のワークは、資材の遅れやワークの遅れなどなくスムーズに進めることができた。cash for work という初の試みでどうなるか不安な面もあったが、村人たちは自分の担当の日にはきちんときてくれて、欠席がほとんどなかったのでよかった。また cash for work をすることで家の誰でもくることができるのでナナイ(お母さん)やお年寄りもワークに参加でき、さまざまな人たちと交流できたのは今までになくよかったと思う。最終日には子供たちが楽しそうにペンキ塗りの手伝いをしてくれ、これからこの橋を大事に使ってくれるだろうと感じた。台風の後で電気が通っておらず、手すりの電気溶接の作業をする時は道具やガソリンの都合上、夜 11 時近くまでかかり、電気がないということの不便さを痛感したが、その夜は多くの村人が見守るとても温かいワークになったと思う。今回フットブリッジの他にも多くのワークを行うことができ、村の問題を解決する手伝いができたのは喜ばしいことだった。フットブリッジを含め、ワークしたところがこれからずっと使われることを心から願う。

７．生活状況

●衣

フィリピンは雨季と乾季の二つの季節が存在する。最高気温が 30℃を超える日がほとんどのため、普段は T シャツ、半ズボン、サンダルといった、かなりラフな服装である。ワーク中でも T シャツ、半ズボンで行うこと多かった。しかし、ワークの際にはケガ防止のために靴を使用することが望ましい。また、朝晩の冷え込みや移動の乗り物でのクーラーは寒いため、長袖などの羽織る衣服が必要。

熱中症対策として帽子と日焼け止めクリームは必須。また、日焼け止めクリームに加え、日焼け防止のためにアームカバーやスポーツ用のアンダーウェア、レギンスなどを着用しているキャンパーもいた。たいていの衣類は現地にて安価で購入することができる。

●食

フィリピン料理は鶏肉、豚肉、野菜、魚を醤油や味の素などで味付けをしたものが中心なの、日本人の味覚に合うものが多い。また主食は米である。大きなトレイに料理が盛り付けられ、そこから各自、自分の皿によそう。スプーンとフォークを使って食べることが一般的である。お祝い事があるとヤギの肉や豚の丸焼きをみんなに振る舞う。フルーツの種類も豊富でマンゴーやリンゴ、バナナといった新鮮でおいしいフルーツを食べることができる。しかし、今回は台風によってココナッツとバナナの木がひどく被害を受けため、これらの果物が市場にほとんど並んでいなかった。やはり、台風の被害による農作物の影響は大きく、価格も全体的に上がっていた。

現地では主に水を飲む。ただし、現地の生水を日本人が飲むと体調を壊す可能性がある。そのため、ミネラルウォーターを購入して必ず飲むようにした。その他にも日本人にも馴染みのあるコーラやスプライトなども村のサリサリという小さなお店で買うことができる。

●住

キャンプ前半では、バランガイホール（村の公民館）を借りて、日本人全員で共同生活を送った。ミーティングや食事もここで行い、寝るときはゴザを敷いた。風通しが良いので体調不良者が出た際にも、ここを使用した。キャンプ後半は２人１組でホームステイを行い、食事も各自のホームステイ先で行った。

台風の被害によって村では電気が通っていなかった。そのため日が落ちると真っ暗になり何も見えなくなる。懐中電灯は必須で夜に移動をする時にはかかせない。村人の中にはソーラー式の懐中電灯を持っている者もいた。また一部の家にジェネレーター（発電機）を所持しており、バランガイホールまで電線を引っ張り、夜になるとバランガイホールに電灯をつけてくれた。記録用のカメラや国内との連絡をとる携帯電話はそのような家庭にお金を支払い、充電をすることができた。

●ディスコ

お酒とダンスが大好きなフィリピン人にとって欠かせないのがディスコ！イベントがある日に行われた。日本のようにクラブハウスで行うようなものではなく、屋外にあるバスケットコートや庭などの広い場所にサウンドシステムを設置し大音量をかけるといったシンプルなものである。音楽がかかると、幼稚園児くらいの小さな子どもからお年寄りまで楽しく踊るから、とても盛り上がる。今回のキャンプでは Welcome Party、 Farewell Party、 誕生日会の３回行った。

●洗濯(ラバ)

洗濯機がないので全て手洗いで行う。大きなたらいに水を溜め、粉末洗剤で汚れを落とした。キャンパー全員分の洗い物を当番制にして 2 人で行った。衣類の数が多いのでとても時間がかかり、更に汚れも少ししか落とすことができない。ホームステイが始まると各自、ホームステイ先で行った。洗濯に必要なものは現地で購入可能である。

●風呂(リーゴ)・トイレ

現地では水浴びが日本でいう風呂にあたる。この水浴びを現地の言葉で「リーゴ」という。浴槽といったものはなくポリバケツやタンクに溜めた水を手桶ですくい浴びる。家によってはトイレとリーゴの場所が同じだったり、外でしたりと家庭によって様々である。当然水なので夜やワーク直後 1 時間の体が熱を持っている時に行うと風邪をひく可能性があるので、日が暮れる前や一休みするなど時間帯を考えて行わないといけない。

トイレは洋式で水洗のところが多い。しかし、便座がなく、日本と比べると低く小さいように感じる。さらに水洗といってもレバーを引いたら自動で流れてくれるものとは異なり、便器の傍に置いてある水を溜めたポリバケツから手桶で水をすくい流す。この時に注意しなければならないのが、フィリピンではペーパーはトイレの詰まる原因になるということだ。そのため使用したペーパーは流さずにゴミ袋を用意しそこに捨てなければならない。

●買い物

村には「サリサリ」と呼ばれる小さな商店があり、お菓子やジュース、洗剤などちょっとした買い物をすることができる。また、村から「ハバルハバル」というバイクタクシーを使って、マタグオブ市のマーケットに 10 分弱かけて行く。マーケットには食料品や衣類、生活用品を買うことができ

る。また、ホームステイ先にプレゼントする写真の印刷をしてくれるお店もある。更にマーケットから車で１時間ほどのところにオルモックという港町がある。ここには大きなスーパーや換金所があり、マーケットではできない買い物や換金をすることができる。

●交通

村から周辺の移動は「ハバルハバル」を利用した。「ハバルハバル」とは中型バイクを使用したバイクタクシーのことで、ドライバーを含め３～４人、乗り方によっては５人まで乗ることができる。オルモックのような離れた場所に行くにはバスやバンを使って移動する。その他、空港―セブ港間はバンまたはジープニー、セブ島―レイテ島間はフェリーを利用した。フィリピンにはサイドカー付きのバイク「トライシクル」など個性的な交通機関が発達している交通機関を利用する際に気をつけないといけないことが料金である。特にバンやタクシーでは高額の運賃を請求するドライバーもいるので、値段交渉はしっかりと行い、乗る前には必ず料金を確かめること。また、現地の人も利用する交通機関もあるので荷物の管理を怠ってはいけない。

8.　各係報告

(1) 保健

＜病院での治療＞

あやこ	3/2　オルモック到着時に、ピアスの穴からの出血	オルモックの私立病院	500 ペソ(薬代込み)
あやこ	腕などに発疹	マタグオブのクリニック	100 ペソ(薬代のみ)
あやか	ワーク時に木材から突出していた釘が足裏に刺さる(実際治療は受けずに済んだため治療費はオルモックで購入してきてもらった薬代のみ)	マタグオブのクリニック	950 ペソ

＜保健バック＆持参した薬での治療＞

乾季でしかも重労働のワークのため体調不良者・けが人が比較的多かった。主な症状として、倦怠感・発熱・疲労・切り傷などがあった。また慣れない環境・食事のためかお腹の調子を下す人も多かった。いずれにおいても保健バックや各自で持参した薬を用いて尚且つ適度な休息・水分補給をすることで次第に回復した。

保健バック(大)　渡航前中身一覧		**保健バック(小)渡航前中身一覧**
サバイバルシート　6 枚	テーピング　(大)十分量／(小) 1 つ	バンテリン(5g)　5 つ
粉末ポカリ(1L 用) 13 袋	絆創膏(小)　13 枚	ザ・ガード(整腸剤)　33 錠
冷えピタ　34 枚	絆創膏(扁平)　4 枚	ヘパリーゼ EX　20 錠
ガーゼ　十分量	絆創膏(中・通常サイズ)　113 枚	生菌整腸剤　20 錠
包帯　1 ロール	絆創膏(大)　19 枚	①COLVAN(かぜ薬)
ムヒ　1.5 個	はさみ　2 つ	②PARACETAMOL(解熱剤)
消毒液　4 個	つめきり　1 つ	③胃痛薬
アルクイック IPa　38 錠	体温計　1 つ	①②③は以前フィリピンにてもらった薬

正露丸　1 瓶	ピンセット　1 つ
便秘薬　50 錠	整腸剤　160 錠
赤玉　5 回分	
使用頻度の高かった備品	冷えピタ・体温計・整腸剤・マスク・ポカリ・絆創膏・消毒液

＜今回の総括＞

病院に行く者もいたがキャンパー全員大病になる事がなかったのは良かった点である。しかし、渡航前に備品の個数・内容を確認していたとはいえ、糖分や塩分補充する備品が少なく後発が日本から買い足して持っていったのは反省点である。下見の時とは異なり乾季の中のワークで確実に疲労が蓄積して体調が優れない人が多かったため下見時よりも本キャンプの時は備品に配慮する必要がある。

＜来年度に向けて＞

・糖分(ポカリなど)&塩分(塩コンブなど)を多めに持っていく

・便秘薬&整腸剤や生理痛用薬、総合かぜ薬は準備して持っていく

・消毒液はやや強めのがあると良い(イソジンやデビオン VG など)

・貧血になりやすい方は鉄分補充できるサプリメントがあると良い

・手洗い用のアルコール消毒液があると良い(コンタクト装着時など)

・推奨されている予防接種としては日本脳炎、A 型肝炎、B 型肝炎、狂犬病、破傷風である。詳しくは以下の FORTH 厚生労働省検疫所のページ参照してください。

http://www.forth.go.jp/index.html

＊ある村人の病気について

ある村人の病気にかかる諸経費を賄うために、キャンパーからの募金を使った。カンソソ村到着時 1 人の若い村人の健康状態が優れない事(例えば、狂犬病に特異的な水に恐怖を抱く、精神的に不安定であるなど)と同時に過去に犬に噛まれた事を、長年 FIWC 九州に協力してくれているロクロクさんから聞く。フィリピンは狂犬病発症が世界で上位に入っていることもあり、狂犬病が疑われ近い将来に亡くなってしまう可能性をロクロクさんより示唆された。一方実際にその村人を診察なさったマタグオブ市のクリニックの医師から、その村人をタクロバンの病院での診察をするように薦められた。緊急性があったがその村人自身・家族共に経済的余裕が全くない状況であった。

そこで今回各キャンパーからお金を募り、タクロバンにある病院(位置は右の写真参照)へ連れて行く経費を負担した(病院に連れて行くために、市役所からレンタルした救急車にてタクロバンまで向かい、キャンパーもロクロクさんも同伴はせずに元村長とクリニックのスタッフが同行した)。その経費には、診察代や薬代が含まれていてそれらにキャンパーからの募金を使用した。

タクロバンでの診察を受けた結果、狂犬病ではなく depression(うつ病)であると診断された事により、近い将来に亡くなってしまうかもしれないという、当初危惧された状況は免れた。当然のことながらあるべき形・最終目標は、その村人の家族自身がその村人の病気・生活をサポートしていく事であると考えている。このために、今回の募金は一過性の対処となってしまうが、キャンプ中賛同してくれたキャンパーによる募金額以上の負担を今後は行わない方針である。尚且つ先の考えのために協力者である別の大人の村人の方と連絡を取り合い、その村人やその家族に対してできる限りの心理的側面におけるサポートを今後ともしていく予定である。

(2)　KP(Kichen Police)

＜仕事内容＞

キャンパーの現地生活が円滑にいくようにサポートする

1. ラバ(洗濯)・皿洗いのシフト表作成
2. 生活用品(桶・ハンガーなど)の管理
3. 水(飲料水・トイレの水)の管理

＜1. 洗濯(ラバ)・皿洗いのシフト表作成＞

渡航前に、ラバ２人・皿洗い２人となる全日程分のシフトを作成した。作成時に、先発と後発で異なる滞在期間を考慮し両者の負担が均等になる事、メンバー同士の交流の場になるように均等にシフトがかぶる事、ワークリーダーがワークのある平日にラバ担当にならない事などに留意した。

(1 の反省点)

・シフト表通りにいかなかった点

→現地での急な予定変更に臨機応変に対応をする

＜2. 生活用品(桶・ハンガーなど)の管理＞

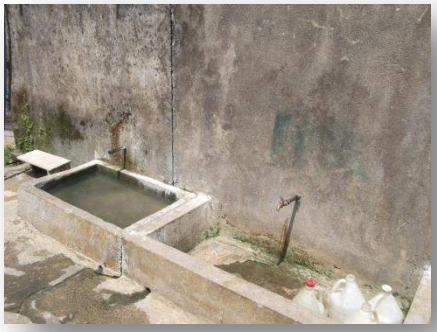
[国内にて]

トイレットペーパー2 ロールとトイレ用ビニール袋多めに持参する事を呼びかけた。

[現地にて]

	たらい	食器用洗剤	洗濯用洗剤	トイレ用ブラシ	手桶	ハンガー
到着直後	×	×	×	×	×	10 本
購入数	2 つ	1 つ スポンジは別途購入	1 袋	×	1 つ	10 本+1 つ
帰国前	2 つ	×	×	×	1 つ	20 本＋1 つ (後者は吊るすタイプ)

＜3. 水(飲料水・トイレの水)の管理＞



飲料水は、大きな市場(マーケット)で大きなタンク 2 つ(1 つは注ぎ口付き)と 1L のペットボトルのミネラルウォーターを購入した。タンクの水は無くなる前に定期的に買いに行った。現地の生水を飲むと日本人は体調を崩す可能性があるためミネラルウォーターを購入して生活していた。

トイレの水は、今回滞在したカンソソ村に蛇口が付いている所が多く基本的に汲みかえる必要がなかった。ただし現地のトイレは水洗ではなく手桶を用いて自分で流さないといけないため、トイレに蛇口のない所では適宜水を汲んでおく必要がある。

(3 の反省点)

・各自のペットボトルに移す用の漏斗を購入していなかった事

→渡航前に購入しておく

・ワークに持っていく飲料水の準備を欠いてしまったこと

→ワーク前の空き時間に準備・確認をする

（3）イベント

(1) Welcome Party　(3/2 Sun)

後発が村に到着した日の夜に開かれた。雨のため、自己紹介や出し物をすることはできなかった。ディスコが用意されていたので、小雨が降っていたが村人たちと楽しく踊りあかした。

(2)Japanese Festival　(3/8 Sat)

〈午前〉　日本語教室

使用したもの…スケッチブック３冊、紙、鉛筆

日常で使う挨拶やお母さん、お父さんなどの名詞、かわいい、かっこいい等の言葉を教えた。事前に、スケッチブックの表にビサヤ語、裏に日本語とローマ字を書いておき、スケッチブックをめくりながら進めていった。村人には、紙と鉛筆を配っておき、スケッチブックの文字を写してもらった。使用した紙と鉛筆は村人にプレゼントした。

○反省

宣伝やポスターの掲示が遅れたため、村人にうまく伝えることができてなかった。また、子どもたちの試験日と重なっていることが把握できておらず、始める時間にあまり人が集まってくれなかった。村人も一緒に発音しながらすすめることができた。

〈お昼休憩〉

バナナを一口大に切ってチョコソースにつけて作ったチョコバナナを村人に配った。

〈午後〉　日本文化（折り紙、習字）

使用したもの…折り紙３６０枚

筆１５本、半紙１００枚、墨汁、新聞紙、ペットボトル

○反省

[折り紙]

・キャンパーの折り紙のレパートリーが少なく、村人に十分に教えることができなかった。

・子どもたちに折り方を教わることで、うまく交流しながら楽しめた。

[習字]

・同じ人が何枚も半紙をもらってみんなに行き届かなかった。

・目が行き届かず、墨汁が子どもにかかることがあった。

・日本語への興味を深めてもらえた。

(2) Farewell Party　(3/15 Sat)

村人たちが Farewell　Party を開いてくれた。たくさんの人が集まってくれて、カピタン（村長）の挨拶や子どもたちのダンスの発表があり、パーティーは大いに盛り上がった。キャンパーも一人ずつスピーチをして、その内容に笑ったり泣いたりと、とても思い出深いものになった。日本人の出し物としてチェリーを歌ったとき、村の子どもたちも一緒に歌ってくれた。豚の丸焼きなどのご馳走が用意された。また、村人に振る舞う日本食としてカレーを作ったが万人受けする味ではなかったようだ。食事の後も夜が更けるまで村人たちとディスコを楽しんだ。

（4）ホームステイ

【主な仕事内容】

・GAM でホームステイについて説明。
・村長にホームステイの概要を話し、ステイする家をあげてもらう。
・ホームステイする家の調査。
・キャンパーから希望をとり、誰がどの家にホームステイをするか決める。
・ホームステイミーティングを開き、ホームステイファミリーに注意事項について説明をする。

【ペア決定までの流れ】

１.候補の家をあげてもらう

GAM 後に村長にホームステイの概要について説明し､ホームステイ可能な家庭をあげてもらう。今回はキャンパーが８人で二人ずつステイするので４軒あげてもらった。

２．ホームステイ先の調査

家族構成、英語が話せる人がいるか、トイレの有無、犬はいるか、男女共に受け入れ可能か、の５点を調査した。

３．希望調査

ホームステイを受け入れる家庭が決まった後に、キャンパーに各家庭について説明を行い、希望のホームステイ先を２軒、紙に書いて提出してもらう。その際に、個人的な希望（苦手な人はいるか、男女どちらがよいか、心配事はあるかなど）も正直に書いてもらった。

４．ペア決定

希望調査を元に、ホームステイ係りで様々なパターンを考えペアを決定した。

※今回は特に要望もなかったため、男女また下見と新キャンパーで分けたが問題はなかった。

【今回のグループ分け】

せいじゅ・あやか	しゅんや・ひーちゃん
ゆうすけ・あやこ	みさき・さとし

【今回のスケジュール】

2/23　GAM

・ホームステイについて説明

3/4　ホームステイ開始４日前

・ホームステイ調査開始

・キャンパーの希望調査

3/6　ホームステイ開始２日前

・ホームステイ先決定

【反省】

○上手くキャンパーの希望に近いように分けることができた。

○ホームステイ中に特に問題はなかった。

×ホームステイミーティングの準備不足。

→今回はロクロクさんと共にミーティングを行う予定だったが、ロクロクさんの体調不良により急遽リーダーとホームステイ係りのみで行うことになった。そのため言語などの面で準備が不足していて、ミーティングをスムーズに行うことができなかった。ロクロクさんはあくまでサポートしていただくためであって、自分たちの本来の役割を忘れてはいけない。

×ホームステイ先の下見が不十分だった。

→ホームステイ候補がよく遊ぶ村の子どもの家庭が多かった。そのため係りでないキャンパーが家に遊びに行った際に見た家の状況を聞くなどして確認をしたので情報が不十分であった。特に問題はなかったが、やはり聞いた情報だけでなくホームステイ係りが家に行って確認するべきであった。

【総括】

バランガイホールでの共同生活もキャンパー同士深く交流ができ良い経験ができるが、ホームステイにもまた共同生活とは別のよさがある。村人と同じ生活を送ることで、フィリピンについて知る良い機会になる。ホームステイ先の家族も私たちを家族として迎えてくれるので本当にうれしい気持ちになった。また、親しくなるのはホームステイ先だけではない。近隣の村人たちとも顔を合わせる機会が増え、今まで話したことのなかった人とも話すことができた。ホームステイ中はキャンパー同士で自分のホームステイファミリーの話ばかりしてしいた。それほど、ホームステイは現地のことをより好きになる特別な時間であった。

(5)　会計

【仕事内容】

・金銭の徴収、管理、換金

・毎日の収支記帳

【料金の目安】

◎宿泊費

・シランガンホテル(セブ島)※エアコン付き

ダブルベッド　975P／部屋、泊

◎交通費

・**船**

セブ島→オルモック(スーパーキャット)　750P／人

オルモック→セブ島(ウィーサム)　575P／人

・**バン**

オルモック→カンソソ　3000P／台

（1 日貸し切り）

マタグオブ→オルモック　100P／人

SM→空港　600P／台

・**タクシー**

船乗り場→SM　150P／台

・**ハバルハバル**

カンソソ→マーケット　10P／人

・トライシクル

マーケット→カンソソ　20P／人

・**トラック**

カンソソ←→タクロバン(往復)　3000P／台

カンソソ→オルモック　1500P／台

◎その他

・空港税　550P／人

※レート(オルモック)

10000 円→4250P

【おおよその旅費】

航空券	57,345
保険料	5,000
生活費	15,000
個人費	10,000
ワーク費	10,000
イベント費	300
キャンプ参加費	1,000
	98,645

(円)

【滞在中の収支】

◎収入

生活費	52,950
繰越金	7,373
資材費	93,450
給与代	173,550
収入合計	327,323

◎支出

ワーク費	資材費	87,014
	給与	158,000
感謝料	ロクロクさん	15,000
	ダディ	5,000
	計	265,014

宿泊費	シランガン	1,575
食費	水	1,050
	食費	8,819
携帯	ロード	1,500
交通費	船	13,600
	バン	8,000
	タクシー	1,592
	ハバルハバル	730
	トライシクル	169
	トラック	4,500
T シャツ	服	1,140
	プリント代	3,000
生活費	電気代	1,260
	薬	1,200
	雑費	2,906
パーティ	ウェルカム	150
	ジャパフェス	135
	フェアウェル	8,467
	カレー	582
	サウンドシステム	1,000
	計	61,375
	支出合計	326,389

※全体の収支

327,327 － 326,389 = 934

(単位：ペソ)

【反省】

・それぞれがきちんとメモをとってくれていたので大きな誤差がでなかった。

・溜め込まずにその日のうちに記帳ができた。

・小さな財布に使う分だけ入れて持ち歩いていたのが便利だった。

・予備費を使わずに済んだ。

９．他己紹介

○せーじゅ○

リーダーのせーじゅはとても頑張り屋な人です。

しかし、村人と仲良くしようと？お酒の場で頑張って飲んでいると彼は豹変します。普段全く見られないその様子は、日本人にとってはとても面白かったぞ。笑

あと個人的には夜のせーじゅの恋愛話…衝撃的でした。笑 それでもメリハリはしっかりしていて、リーダーとして日頃はみんなを上手くまとめてくれました。毎晩ロクロクさんとのミーティングおつかれさま！

一緒にキャンプ行けてよかった！さらまー♪

From ぐっさん

●みさき●

我らがワークリーダー陣内美咲。

今回のキャンプは初の cash for work。それでいきなりのワークリーダー。負担が大きかったと思うけど、想像した以上に大活躍していた美咲。よく食べてよく笑ってよく遊んで今回のキャンプが今までで一番美咲らしくて輝いていた。これも全部カピタンのおかげかな？(笑)あのカピタンの力って凄いね。

そして帰りの船の寝顔は最高に可愛くてこのキャンプがどれほど楽しかったのかが表れてたよ(笑)

ワークリーダー本当にお疲れ様。

From しゅんや

○ぐっさん○

この写真が全てを物語っています・・・
そう！ぐっさんは幼女が大好きなのです！(笑)でもこの長い爪で奏でるギター姿やノリのいいぐっさんはかっこよかったぞぉー(*^o^*)/
そんなぐっさんと下見からキャンプやってこれてほんとーに楽しかった！！！またカンソソ行こうなっ！！

From ゆーすけ

●しゅんや●

現地の子ども達に負けないくらいお目めキラキラのしゅんやは、面白いこと言うのが好きな盛り上げ役！でも体調くずして寝込んでしまう繊細な一面もあって、それでも他のメンバーのケガとか体調に気をつかえる優しさも兼ね備えていましたね。
そんなしゅんやはもちろん現地の子ども達にもモテモテで、リーゴ中を覗かれるほどの人気♡
日本人にも現地の美人にも人気者のしゅんやでした～

From あやこ

○ゆーすけ○

プレーボーイゆーすけ！キャンプ初日から夕飯の時間に帰って来ず、皆に心配をかけたり、BRGY ホールにキャンパーを閉じ込めたり、最終日は酔っぱらってありえない踊りをしたり・・・とても問題児のゆーちゃん。下見の時の 100 倍はっちゃけていたね。

でも誰よりもキャンパーのことを考えて、誰も見ていないところでも一生懸命働いてくれるゆーちゃんに何度助けられたことか・・・。とても仲間思いの熱い男です。女子力も高いです。字は下手です。ゆーちゃんとキャンプできて楽しかったぞー！

From みさき

●あきお●

Funny boy あっきーら！残念ながら今回は一緒にキャンプ行けなかったけれど、国内係りとして頑張ってくれました。本人不在でも、彼の人気が一番だったことは間違いない。何度「あきおはどこ？」と聞かれたことか・・・。

下見の時から優しいお兄ちゃん的存在で、本当に本当にいい男です。よく福山雅治のものまねをしますが全く似てません。心からやめてほしいです。

あっきーらがいなくて皆寂しがってたよ。私も寂しかったよ。いつか一緒に完成した橋を見にカンソソに帰ろうね～。ありがとう！！

From みさき

○あやか○

笑顔が素敵なあやか！あやかの元気いっぱいの姿にみんな元気もらったよー！！同じ新キャンパーとして、あやかの前向きな姿にはホント支えられました！

ただ、足に釘が刺さって血が出たり、靴擦れで足の皮がやぶれたり。そう考えると今回のキャンプであやかの足ボロボロ笑　大したケガやなくてよかったよ。

あと会計！ワーク後みんな休んどるのに 1 人お金の計算お疲れ様！

今度は同じ FI の広報としてゆうすけと 3 人でがんばりましょー！！

From さとし

●さとし●

通称モンスター、またの名をカモーティ。さとしが子どもたちからまともに名前を呼ばれているのを私はほとんど聞いたことがありません。(笑)

さとしとしゃべっているときはとにかく楽しくて、ずっと笑ってた！さとしは、バカみたいな話にノリよくつきあってくれるおもしろい人！！かと思えば、ミックスセメントにまじめに取り組んでて、やるときはやる男だね！！ホームステイと記録係り、おつかれさま！！

From ひーちゃん

○あやこ○

あやこの一番最初の印象はおとなしいだった。

しかし、キャンプが始まってみると…。あやこのノリのせいで何度か危ない目に遭わされました。だから、子供たちからいじられている姿は面白かったよ。(笑)　まぁそれほど人気があったってことだね。

また、イベントとしての準備や当日の運営、本当にありがとう！

From　せいじゅ

●ひーちゃん●

キャンプ前には 1 度会っただけで、最初はどんな子だろー仲良くなれるかなーって思ってた。でもひーちゃんは物怖じすることなく、キャンパーにも村人にも笑顔いっぱい元気いっぱいだったね！ひーちゃんの鋭いツッコミには何度も笑いました！

ひーちゃんとキャンプに行けて良かった(^o^)ありがとう！

From　あやか

10. 感想

・せいじゅ

フィリピンキャンプとは何だったのであろうか。日本に帰ってくるといつも、フィリピンでの生活は夢の中のことであったかのように感じる。現実味がない。それほど自分の日本での生活に比べ、いかにフィリピンでの１か月が濃いものであったかが分かる。特に今回のキャンプは変更の連続だった。下見キャンプで、皆で何時間も話し合ってようやくキャンプ地を決定して、さぁ新たにキャンパーを募集するぞというところでハイエン(台風)がフィリピンを襲い、私たちが長年活動してきたマタグオブ市も大きな被害を受けた。本キャンプへの希望が見えず、キャンプ中止の判断をした。キャンプをするとなると多くの人にお世話になるため、ただでさえ自分たちの生活で大変なのに迷惑をかけてしまう。また、フットブリッジを作るというワークが、ハイエンによって物理的・経済的にダメージを受けた今の村にとって、ニーズと合わないと思ったからだ。しかしハイエンから２か月くらい経ったとき、OB の方が現地の調査に行ってくださり、Cash for work という形でキャンプを行うことが可能になった。急いでメンバーを集めて、出発まで駆け足で準備を進めていった。

下見中は日本人とカンソソ村の人たちとの距離を感じており、実はキャンプ前はそれがすごく心配だった。しかし村に着いてみると、村人からどんどん日本人に話しかけてくれたし、キャンパーも普通に村人と仲良くしているように見え、そんな心配は無用だった。ワークが始まり、おじさん達と話す機会もできた。一緒にワークをしたハバルドライバー(バイクタクシーの運転手)のおじさんは、ハイエン前後で収入が大きく減り生活が苦しいと言っていた。しかし幸せだと言っていた。それは、家族がいるからだと。奥さんと２人の子供がいるから幸せだと言っていた。他の村人たちも、ハイエンが来たからといって悲しい顔をしている人は誰もおらず、みんな笑顔だった。みんな積極的に小学校の修理やフットブリッジ建設を一緒にしてくれた。お金が貰えるから働いているのではなく、私たちはバヤニハン(ボランティア)でしているんだと。そしてありがとうって言ってくれた。みんなが安全に生活を送ることができるからと。また、誕生パーティーに招待してくれたり、ご飯を作ってくれたり、お酒に誘ってくれたり、私たち日本人のことを友達として、本当の家族として扱ってくれた。この村の人たちはこんなにも人のことを想い、村を愛しているんだと思った。ハイエンによって電気は未だ通ってなくて夜は暗いし、小学校や多くの家が壊れて、今後の仕事やお金がない。物理的・精神的にもダメージを受けたはず。だけども皆で支えあって、カンソソ村の人たちは力強く生きている。人の力はすごいと感じた。

ワークも終わり、最終日の夜に村人が Farewell party を開いてくれた。日本人はバスケ

ットコートで村人とディスコをしたり、お酒をフラフラになるまで呑んだりして村人との別れを惜しんだ。そんな中、エンジニアのロクロクさんは１人早く寝床に着いた。ディスコは夜の１時ごろには終わり、次の日に備え日本人も皆眠った。そして朝５時前、まだ真っ暗いなか、日本人の皆が寝ている時間にロクロクさんは別れを言わずに BRGY ホールを去ろうとした。その時たまたま起きたさとしに起こされ、私はロクロクさんの後を追いかけた。BRGY ホールの入り口は外から鍵をかけていたから、裏口からスリッパもなく、裸足になって夢中でロクロクさんの後に着いて行った。ロクロクさんともう２度と会えなくなると思うと、追いかけられずにはいられなかった。目の前から去る親を追いかける、子供のような気持だった。ロクロクさんがハバルでカンソソ村を去る直前にハグをした。その時ロクロクさんはありがとうと言った。ロクロクさん自身もハイエンの被害を受けていて、高齢や持病で体調も優れないのに、自分たちが日本にいる間も準備をしてくれたり、キャンプ中も、村人との間に入って通訳してくれることもあったり、ワークの現場で指揮をふったり、私たち日本人の体や心の心配もしてくれて、本当に私たちのことを考えてくれて、言葉では言い切れないほど助けてもらった。そんなことない、自分たちの方がはるかに多く助けてもらっている、本当に本当に感謝していると伝えたかったけど、この時にこの気持ちをどう伝えたらいいか分からず、ただ、ありがとうとしか言えなかった。ロクロクさんがいなくなって初めて、どれだけロクロクさんが自分にとって心の支えになっていたかが分かったと同時に、どれだけ頼っていたかが分かった。自分はこの間、成人式を迎えてひとりの大人になって、また、リーダーとしてこのキャンプに臨んで、責任と伴に自分が皆の上に立ってまとめないといけないはずなのに、こんなにもロクロクさんに頼っていて、もっとロクロクさんに頼らずにキャンプをできたのではないか、そう思うと悔しくて、結局それから眠れなかった。

キャンプが終わった今思い返してみると、多くの人に支えられたキャンプだったと思う。ハイエン直後に多くの方から寄付を頂き、また先輩に背中を押してもらったり、ダディーに不足分の資材を切り出してもらったり、村の属する市からカウンターパートを出してもらったり。また、私たちを快く迎えてくれた、愛であふれるカンソソ村の皆、全力でサポートしてくれたロクロクさん、そして何よりキャンパーの皆、本当にありがとうございました。自分にとってフィリピンキャンプと関われた時間は宝物です。今でもキャンプのことを夢で見ることがあり、やっぱりフィリピンに行っていたのは夢ではないかと思うことがある。だけど、手元には村人からのリメンバランスがあるし、手足はまだ真っ黒いし、何よりカンソソに行けば、村人と日本人とで汗水たらして作ったフットブリッジがあると思うから、だからあの時間は夢ではないと思う。いつかキャンパー皆でカンソソ村に戻って、最後泣いてカンソソ村を出てきたから今度は笑って、夢じゃないか確かめるように、あの赤いフットブリッジを、思い出話をしながら渡りたいな。

最後に、このキャンプに関わってくださった皆さんに感謝します。

・みさき

キャンプが終わった今、振り返ってみるとこの本キャンプはあっという間だった気がする。でもそれは、それまでの道のりが長かったから。レイテ島を台風が襲った時、私たちは新キャンパー募集をする段階だった。被害が明らかになりキャンプをするか決められないまま時が経ち、キャンプをあきらめつつあった。去年キャンプをしたサンドニシオ村が大きな被害を受けていること、今回のキャンプ地のカンソソ村と連絡がとれないこと、そしてキャンプができないということで私は頭がおかしくなりそうだった。本キャンプに行きたいと言っている人もいるのに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。周りの人たちはいろいろ言ってくれるけれど、「そんなことわかってるよ！」と心の中では思っていた。そんな時ぬけさんの一声でキャンプへの光が見えた。またリーダーの星授が前向きだったのも私には大きかった。キャンプが正式に決まったのは一月中旬。普段なら MTG もほとんど終わっている頃。それでも新キャンパーが四人も集まったのは奇跡だと思う。不安は沢山あった。cash for work という初の試みをすること。下見メンバーのあきおの不参加とぐっさんの途中帰国。キャンパーが去年の半分で、MTG も十分にできなかったこと。正直、このメンバーで本当にやっていけるのか心配だった。

キャンプに行って思ったこと。それは新しいキャンプになったということ。行く前は、「去年ならこうだったのに…」とか「もっと人数がいればこうだったのに…」とばかり考えていた。だけど実際キャンプが始まればそれも考えなくなった。今までの自分は何事も『例年通り』が正しいという考え方だった。でもそれだけが正解じゃないと思った。もちろん歴代のキャンパーが築いてきたものは大切にするべきだが、それほど型にはまり過ぎる必要はないと思った。私たちは私たちのやり方でやればいい。キャンパーが少ない分、一人一人の負担は大きく皆かなりしんどかったとは思うが、その分キャンパー内の密は濃かったし、一人一人を大切にできたと思う。

そしてワーク。今回私はワークリーダーをやったがそれもキャンプに行くまでは私がなるわけではなかった。後発が来るまでの代わりのつもりだったが、実際ワークが始まってみると、私がこのまま続けるべきだと思った。私は体力がないので男子並みには働けない。そんな私がワークリーダーとして何ができるか考えた時に一番に思ったのが、とにかく笑顔で楽しくワークができるように導くこと。今回は三日でバヤニハンが交代してしまうのでなかなか深く交流するのは難しい。でもプラスに考えると沢山の人たちとワークができる！それも今まではいなかったナナイやお年寄りたちまで！とにかく一人でも多くの村人の名前を覚えて、話しかけるのに必死だった。去年は苦手だった青年たちにも声をかけた。その甲斐あってか沢山の人が自分のワークが終わってからも「みさきー！」と声をかけて

くれた。もちろんワークリーダーをやるにあたって悩むことも多かった。もっと村人ともロクロクさんともコミュニケーションをとるべきだと思うこともあったし、自分が情けなくなることもあった。それでもキャンパー達も村人たちも皆協力してくれてフォローしてくれて本当に助かった。また自分にできることを前向きに取り組めたのも大きな成長だと思う。最終日、子供たちが楽しそうに橋の手すりにペンキを塗っているときはにやけが止まらなかった。去年の下見から始まってゼロからこのキャンプに携われたこと、何もないところに橋がかかったこと、言葉にするのが難しいけれどいろいろな思いが込みあがってきた。心から思う。カンソソでワークをしてよかったと。

台風の後ということで以前とは大きく変わっていた。いたる所で工事をしているし、倒れた木も倒壊した建物も沢山あった。トゥバもなく貧しくなっているのでお酒を飲む人も少ない。そして何よりも電気がないことが大きかった。ホームステイ中ろうそくの明かりだけで過ごした時、改めて台風の被害の大きさを感じた。それでも村人たちは私たちのことを快く受け入れてくれて毎日が本当に楽しかった。フィリピンの歌や日本の歌をエンドレスで歌ったり、子供たちやナナイやタタイやオカマちゃんたちと騒いで踊って。たくさんの村人に「カンソソでワークをしてくれてありがとう」「子供たちの安全を守ってくれてありがとう」と言われて胸が熱くなった。最後の夜、電気が通ってない状況の中で村人たちが私たちのためにとてもすてきなパーティーを開いてくれて本当に嬉しかった。もう感謝の言葉しかない。

長かったようで短かったキャンプ。このキャンプをするにあたって本当に沢山の人たちが協力してくれた。OB、OG はもちろん、村も市も私たちのプロジェクトに全力で協力してくれた。そしてタタイロクロク。彼がいなければこのキャンプはできなかったと断言できる。私たちの見えないところで大量のココランバーを切ってくれたダディ。数えきれないくらい多くの人の支えのおかげでこのキャンプは成功した。心から感謝します。ありがとうございました。そしてキャンパー！！ひーちゃん、さとっし、あやか、あやこ、あっきーら、ゆーすけ、しゅんや、ぐっち、そしてせーじゅ！一人一人がこのキャンプのかけがえのない存在。本当にありがとう。

台風後初のキャンプ。私たちだけではなく多くの人や団体がフィリピンのため、大切な人のためにと動いていました。その中のほんの少しかもしれないけれど、大好きなフィリピン、大好きな人たちの力になれたことが私の誇りです。

・ぐっさん

３度目のフィリピン。フィリピンキャンプとして行くのはおそらく最後、しかし自分の都合上今回は 9 日間のみの滞在となった。短い期間ではあるが、それでも行くことを決めたのは、ただ一つ、村人たちに会って安心したかったからだ。というのはご存知の通り２０１３年１１月に大型台風がレイテ島に直撃し大変な被害をもたらした。その直後は自分たちが訪れていたマタグオブ市の情報がなかなか入ってこなくて、不安がどんどん増していったのを覚えている。正直言うと、現地の村人とは一緒に過ごしていたのもあって、東北大震災の時よりも身近に感じて心配だった。

実際に行ってみると、壊れた家屋や実のないココナッツの木など台風当時の様子を物語るものが思っていた以上にたくさんあった。それらを見てると、日本で村人の無事は確認していたものの、大丈夫なのだろうか、ちゃんとワークが出来るのだろうかと再び不安になった。しかし村に着いて再会したところ、村人は前回訪れた時と変わらないくらいとても元気だった。完全な復興にはまだまだな環境であるのに、それを物ともせず暮らしている姿がとてもすごいな思った。

再会した後は、良い意味でちょうど前回とまったく変わらないフィリピン生活が始まった。朝早く子供たちの声で起きて、炎天下で村人とワーク、休憩時間は疲れているものの、つい子供たちを追いかけたり青年とバスケをしたり、夕食はオカマの奇声に悩まされながらも食事はにぎやかで…すべてが楽しかった。そんな中で自分は滞在中総合サポーターとしてワークリーダー（と同じ仕事）を任された。そこではもちろんいろんな喜びだったり悩んだこともあったが、自分の中で一番印象に残っているのは、今回の橋の設計などをしてくれて、また毎晩ミーティングをしてくれたロクロクさんのことである。毎回ミーティングではこちら側の原因で会話がなかなか成立しない中、ロクロクさんはそんな気持ちを汲み取って何度も意思疎通を図ろうとしてくれた。これはワークリーダーとしてより増した責任感のせいか下見キャンプの時以上に感じたことで、自分にはそういう所は全然足りないなと改めて思った。またロクロクさんはほんとに自分たちを信頼してくれているんだなと思った。そういう意味では歴代のフィリピンキャンパーが作り上げてきたこの関係は驚くべきことなんだと思う。

短い期間でもいろんなことあって、しかもすべてが充実していてキャンプに行けて本当よかったと思う。それは途中で帰る自分に対して気を遣って楽しませてくれたキャンパーのおかげだ。ほんとありがとう。またいつか戻ってこようね。

・しゅんや

去年の 11 月にフィリピンを襲った大型台風によって 1 度は断念したこのキャンプ。まさかフィリピンに行くことができるとは思ってもいなかったし、いきなりのキャンプ決定だったので新キャンパーもそんなに集めることができず MTG もそんなにできなかった。そんなバタバタな中で自分たちのキャンプが始まった。今回は人数が少なく、一人ひとりに負担がかかり大変になるだろなと考えていたキャンプ前、それが見事に的中したキャンプだったと思う(笑)。だけど負担が大きいからこそそれぞれに役割があって、活躍出来ていたキャンプでもあった。そんな自分たちが村人にできることは少しでも元気を与えることで、その一つが cash for work。大型台風によって家や仕事を失ったり、食べ物に困ったり、村人たちから奪ったものはたくさんあるが、何より村人への精神的なダメージは大きかったのではないかと思う。そんな村人たちのための cash for work。そんなに大金を渡すことはできないけれど、たくさんの村人がこのワークに参加した。日本人がちょくちょく休憩をとっているにも関わらず、村人はあまり休憩もとらず必死で働いて、日本人の入る隙間がないほど一生懸命だった。いつもふざけているフィリピン人はそこにはいなかった。お金を貰う側としては一生懸命に働くことは普通のことだし、今村人にはお金が必要なのだとワーク終わりの給料を受け取るときの彼らの笑顔からとても感じた。今まではバヤニハンとして村人を集めて一緒に楽しく絆を深めながらワークをしていて、今回もそんなスタンスで行うだろうなと思っていたが、給料を支払うということで真面目に働く村人たち、大変だったせいもあってかワーク中の会話があまりなかった。給料を渡す時も、そこには渡す側と貰う側がいる。そんなのは当たり前のことだけど、できれば給料を渡すワークではなくてバヤニハンでやるワークを望んでいる自分がいた。だけど、今回の状況ではそんなこと言ってはいられないし、給料を渡される時の村人の笑顔を見ると、いかにお金が必要なのかも伝わってくる。何よりお金が必要なことはキャンプする前から分かっていたことであって、今回のキャンプはそれが目的の一つでもある。だけど、このフットブリッジや学校修繕のワークが、村人にとってはお金を貰うためにやっていることで、ただの仕事として、真面目に働かなければいけないと思って作業しているのではないかと考える自分がいた。そんなワークは何だか悲しいなと感じていた。そういう想いを誰にも話せずにいた自分を察したかのようにあるキャンパーが教えてくれた。それはある村人が言っていたこと。「お金が必要なのは確かだ

けど、それよりも自分たちは子供たちの危険を減らすためにフットブリッジや学校の修理をやっている。それに何より日本人とワークをするのが楽しい。だから、自分たちはバヤニハンとしてこうしてワークをしているんだよ」

もしかしたら自分が抱いたような村人もいるかもしれないが、勝手な思い込みをしてしまったことを深く反省した。海外でワークすることで変に堅く考えてしまっている自分がいて、それまでのワークでも自然と村人との間で壁をつくっていたのかもしれない。単純だけどこの言葉でいろいろ気づかされた。話しかければ笑顔を見せてくれるお母さんたち。バケツリレーをすると喜んで参加するお父さんたち。力持ちだと褒めてあげると照れながらも嬉しがる青年たち。自分だけが変に考えすぎていたのであって、いつもの FIWC らしい、村人と話したり歌ったりふざけ合ったりして見えない輪を自然と築きあげていく光景がそこにはあった。毎日の会話やワーク、たわいもないこと全てが自分たち日本人と村人たちを結び付けていて、その深い関係性があるからこそ日々の生活でいろいろなありがとうが聞こえてくる。このキャンプ中にも村人からたくさんの salamat!!という言葉を頂いた。何に感謝してるのかなと思いある村人に聞いたときに、「ここに来てくれたことが嬉しい。日本人が来てくれたから毎日が楽しい。ずっといてほしい。」と言われた。フィリピン人からその言葉を言われると本当にこの村でキャンプをして良かったと思える。自分たち日本人もできればずっと一緒にいたい。お互いがこう思える、そんなキャンプができて良かったし、これが FIWC の魅力なんだなと思った。それぞれの代で様々な色のキャンプがあると思うけど、どのキャンプも同じで、キャンパーにとってそのキャンプ地の村人たちはかけがえのない存在であって、切っても切れない関係を築き上げたんだろなと今回の復興支援でとても感じた。そんな関係を村人と築けるのもこの FIWC の魅力だなと思う。そんな FIWC の一員としてキャンプができたことが凄く誇らしい。３回キャンプに参加して３回ともキャンパーに恵まれていたし、充実したキャンプだった。FIWC としてキャンプに参加できるのがこれで最後と思うと凄く寂しいけど、有終の美でキャンプを終えることができたし、何より、このキャンプは自分にとっては一生ものの宝物になった。キャンパーに出会えたことカンソソの村人に出会えたこと、カンソソ村でワークができたことこのキャンプの全てが自分の誇りだ。みんなありがとう。

・ゆーすけ

去年レイテ島を襲った台風後の人々の・躍進力・自発性に僕は下見の時の考えを変えざるを得なかった。それを通して、「FIWC 九州なりの」村の活性化、国際協力を学べたのではないかと思う。

2013 年 11 月 8 日大型台風ヨランダ(ハイエン)が自分らの活動拠点であるフィリピンレイテ島に上陸し、多くの方の命と家屋そして生活基盤が奪われた。この様子や暴動や強奪の様子をテレビを通じて見て、一番強く感じた事は自分らに出来る事はいったい何であるのか、組織力も資金面も非常に長けている国際 NGO らが介入している程の状況下でただの日

本人学生の集団が彼らに何のベネフィットを提供できるのだろうか、という事であった。一方そんなことで自分自身悶々としていた日々が過ぎる中で、テレビ・新聞・SNS などを通じて次々と現地の情報が舞い込んできた。壊滅的被害から短期間で着々と修復されていく建物・十分な食事も雨風をしのぐ自宅もない現地の方の屈託のない表情など、特に”roofless houseless but not hopeless”というフレーズには心揺さぶられた。彼らの姿から彼らの底力を垣間見れたように思え、躍進力・自発性にはただただ感嘆しかなかった。これに加え本キャンプ中に、ジャパフェスにおける学ぶ姿勢・主要産業であるココナッツの倒木をさえも遊び道具にする子供たち・猛暑の中文字通り懸命に労働し、電気量も乏しいのに日没後ライトアップしてまでも普段決して行わない時間まで作業をする大人の方達・被害直後と今回訪問時のタクロバンの変容具合を、体感して現地の人の躍進力・自発性をよりいっそう思い知らされた。この結果、下見後に抱いた「僕らが」カンソソで(恩返しのために)フットブリッジのワークを結実させるという考えを、僕は改心せざるを得なかった。去年の夏に彼らに出会って以降、何度生きる希望・活力をもらったことだろう、彼らの健気な姿に何度心救われたことだろう、そんな大好きな彼らのために何かしてあげねば！してあげたい！という気持ちが強すぎたのか、立ち位置を誤っていたようだ。村の活性化を行っていく主体は、決して「僕ら」なのではなくあくまでも「彼ら」自身である事、尚且つ僕らが出来る事は「村の活性化」ではなく「村人の感情の活性化」程度である事に気づかされた。

自分の考えの改心があったにせよ、落ち込むよりもむしろやる気に満ちた。組織ばった国際的団体が扱うような「村の活性化」より「村人の感情の活性化」というのは、彼らの生活により根付きより自由が利く学生団体の僕らの方がふさわしく出来る事のように思えて、むしろ気づかされた事が腑に落ちた。「村人の感情の活性化」を人口の多いカンソソ村にて行うために、「快適に！」(僕らと関わらなかったときより多く楽しい・面白いと思ってもらう機会や時を増やす)をモットーに言動しようと自分は決意した。一例として自分の村に外国人がいる事を不快ではなくむしろ愉快と思ってもらえるように、子供だけでなく青年・お父さんお母さん方など多くの村人にバシバシ自ら声をかけてコミュニケーションをとる事&酒やディスコの場は必ず参加し最後まで交流する事などを、かなり意識的に行った。そして滞在約 1 ヶ月間に、下見の farewell party よりも本キャンでの wellcome party、それよりも本キャンでの farewell party の参加者が多く彼らから日本人と接しようとしてくれた、普段の生活で必要でない日本語を始めとする日本の文化について執拗に問いただしてくる程僕らの事を理解しようとしてくれた、そして特に初めは話しかけても会話すらしてくれなかった人らが最後には涙を流しまた会いたいと言ってくれた。

これら全ては、何も持たない自分らが自分らに出来る事をしてきて彼らの感情を高めることができた結果のように感じる。またこれを感じた別の理由としては、フットブリッジの竣工がある。何年か前に予定されていたが実現されなかった橋建設に奮起してくれ普段では作業しない夜遅くまで工事を行ってくれたのは、僕らが彼らに思うのと同様に、相手がいるからこそ湧き出てくる力によると思う。あのフットブリッジは、ただのコンクリートの塊でもただの建造物でもなく、僕らと彼らとの相互作用し合った結果村人の感情の段階的な活性化により具現化された産物なんだと感じた。次いで感じた事がもう一つあった。それは、もしこのフットブリッジにより何かしらの経済効果があがる(これほど仰仰しくなくとも、もっと単純にハバル代が安くなる等)・事後評価がよくなるのであれば、こんな僕らでも村の活性化の一端に加担できているのではないか、という事であった。これはあくまでも仮定があって初めて成り立つ事である。しかし、村人の生活の深部にまで根を張った活動を行う FIWC 九州だからこそ、逆に技術もない財力もない学生だからこそ、共同生活・共同労働を通して彼らの気持ちを高めそれがカスケード式に伝播していくことにより可能な村の活性化・国際協力の形であると思った。

今回の本キャンプはかなり紆余曲折を経て多くの障壁にぶつかり大変であったが、ほんとーに楽しかった。冒頭にある写真のように見知らぬおっちゃんとバカ騒ぎする事も、音楽に合わせて上裸で踊り狂う事も、エンペラドールをボトルごと飲み記憶を失くす事も、セメント 40kg を頭に担ぐ事も、マーケットで nanay ギンギンとゲラゲラ笑いながら値引交渉する事も、日本では絶対しないけど全部いい思い出である！！相当ハメを外し他のメンバーには多大なご迷惑をかけて申し訳ない気持ちでいっぱいではあるが、それ以上に他のメンバーには感謝している。全メンバーを牽引した包容力のあるせーじゅ、常に楽しいを心がける気の遣えるみさき、いつでも写真かっこいい頼れるしゅんや、食事の時「はい、(手を)合わせました！」と言ってくれたムードメーカーのさとし、人一倍動き回り「大丈夫！大丈夫！」といつも言う頑張り屋さんのあやか、ワーク中いつも長袖長ズボンで日焼け予防していたサバサバ乙女のひーちゃん、人柄から皆を和ましてくれるおっとり屋さんのあやこ、皆ほんとにありがとう！そして大好きです(^o^)/これからは一時の関係ではなく一生の関係を築けていけるように彼らと連絡をずっと取っていき会い続けたい。そしてまたいつか皆揃って再会してあの橋のところでわいわいしたいな。

・あやか

私にとって初めてのフィリピンキャンプ。私が今回このキャンプに参加するにあたって考えていたこと。それは「向き合う」ことである。昨年 11 月に超大型台風がフィリピンをおそった。日本にいながら様々なメディアを通して台風の被害について知ることはできたが、現地の人達の思いやニーズまでは分からない。現地でしか分からない台風の被害と現状を、自分自身で見て聞いて感じて、しっかり向き合って考えたいと思った。そしてもうひとつ。自分自身と向き合うということである。これは、私がこのキャンプに参加するこ

とを決めた理由でもある。私は、自分のことが大嫌いだ。人見知りで人と喋ることも苦手で、自分の意見を持ってそれを発信するということがなかなかできない。また、何をやっても中途半端で、やりたい！と思うことがあっても、企画力も行動力もそれを越える勇気もなく、どうせ自分にはできないっていう言い訳で逃げてばかりであった。高校時代から先輩が東南アジアでボランティアをしている写真を Facebook で見て、自分も将来こんなことがしたいとずっと思っていた。でも英語できないし…とか、そんなコミュ力ないし…とか、マイナスなことばかり考えて踏み出せずにいた。私が FIWC 九州やフィリピンキャンプのことを知ったのは、このように心の中で１人でもがいていたときだった。初めて行ったフィリピンキャンプの説明会でのせーじゅ、しゅんや、ゆーすけの姿は今でも覚えている。３人ともすごく楽しそうにフィリピンキャンプについて熱く語ってくれた。私１人のために(笑)写真やムービーを見せてもらいながら、この時のこれが！この子が！そうそうここでは！ってどんどんいろんなことを話してくれて正直圧倒されてたけど、こんなに夢中になれることがあるってことがその時の私にはすごく羨ましかった。それと同時に私もこんな風に全力で没頭できるものと出会いたい、今までの逃げてばかりの自分を変えたいと思い、フィリピンキャンプへの参加を決意した。そして、自分自身のダメな部分としっかり向き合って、成長して日本に帰ってきたいと思った。

約１ヶ月のキャンプを終えて。もちろんすごく楽しかった。でもそれよりも悩んで考えていたことの方が多かったように思う。フィリピンでの生活や食事にはすぐに慣れた。しかし、現地の人と話すのは最後までビクビクしていた。もちろん会話するのが楽しくなかった訳じゃないけど、相手の言ってることが分からなくてよく縮こまってしまっていた。それと、本当に１日１日みんなについていくのがやっとだったなぁと思う。現地では感じること考えることがすごく多くて、でも立ち止まってる時間なんかなく周りはどんどん進んでいって…。周りにおいていかれるのが怖くて、とにかく毎日いっぱいいっぱいだった。２つとも今考えたらせっかくの時間をもったいないことしたなって思う。

現地の人達はすごく優しくてフレンドリーだった。どの村人も本物の家族みたいに親切にしてくれる。毎日美味しいご飯を作って、わざわざジュースまで出してくれたし、BRGY ホールの水が止まって困ってたら、水が出る家を貸してくれた。会う度に名前呼んでくれる村人や、ちょっかい出してくる子供たちもすごく嬉しかった。夜１人で外で泣いてたのを村人に見つかってずっと横で慰めてもらった時は、嬉しさと申し訳なさでさらに泣いてしまった。そして、一緒にキャンプしたキャンパー達。たくさん気をつかって声かけてくれたり手紙書いてくれたり。心からこのメンバーとキャンプができて良かったと思うし、無事キャンプを終えることができたのはみんなのおかげだ。特に下見キャンパーのみんな。下見キャンパーを見てると、１からキャンプを作るってこういうことなんだ、ワークキャンプってこういうものなんだっていうのが改めて分かった気がする。せっかくなら自分も下見から行って、キャンプを１から作りあげる喜びを味わいたかったなぁと思う。他にも、このキャンプに関わってくれたたくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいだ。FIWC のメン

バーとしてキャンプに参加できたことは私の誇りである。こんなに良い経験ができる幸せを当たり前と思わず、次の１歩につなげていきたい。

今回のキャンプを振り返って、本当に充実した１ヶ月間だったと思う。だけど、考えれば考えるほどやり残したことが多い。キャンプ前に掲げた「向き合う」というテーマ。今回は滞在中に台風の被害の大きかったタクロバンにも行き、建物が壊れたままの現状を間近で見ることができた。また、私たちが滞在したカンソソ村でも、台風の襲来以降電気の復旧はまだだったし、壊れたままの建築物もいくつかあった。そして、一番衝撃的だったのはココナッツの木がなぎ倒されている様子である。どこを通ってもどこを見ても木がバタバタ倒れており、かろうじて立っている木でさえ葉がしおれていた。そんな見るからに分かる現状の中でもっと村人の感情を直接話して聞きたかったなと今は思う。また、今までと全く異なる環境の中では自分自身の弱さもはっきりと見えた。しかし、その弱さを越えるあと１歩、その勇気が足りなかった。そのちょっとの勇気で一言が言えてたら、ただ一緒にワークをしたり遊んだりするだけじゃなく、もっと収穫の多いキャンプになったんじゃないかなと思う。

このように、私にとっては少し後悔の残る形でフィリピンキャンプが終わった。しかし、この１ヶ月が私にとって大切な宝物となる時間となったことに変わりはない。私はフィリピンが大好きでカンソソが大好きだ。今回の後悔を晴らすためにも、お世話になった村人に恩返しするためにも、絶対にもう一度この地に戻ってこようと、カンソソを出るときに決意した。

・さとし

まず、本当に参加してよかった。約１か月フィリピンに滞在したことで多くの人や物、感情、その他たくさんのことに出会えることができた。やっぱり、実際に行ってみないとわからないことばかりです。

以前に大学が企画するフィリピンワークキャンプに参加したことがあるので、FIWC 九州のメンバーとしては初めてだが、実際には２回目のフィリピンワークキャンプになる。僕が参加した大きな理由の一つとしてやはり今回の台風被害がある。以前訪れた場所はマニラ近郊なのでレイテ島には訪れたことはないが、それでも face book などにあげられる被害の写真には何か胸に刺さるものがあった。それと同時にそういった時に何もできない自分にも気が付くことができた。何かしようと思っても行動できない。自分自身がとても情けないというか残念。その時に FIWC 九州の募金活動を知り、参加することにした。

村に着いた時のあの空気。たまらなく気持ちいい。村の子どもは無邪気で人懐っこくて自分も小学生に戻ったくらいに楽しむことができた。ワークが始まると子どもたちよりも青年やタタイ・ナナイと触れ合うことが増えた。正直、最初は話すのが不安だった。自分が英語全くしゃべれないっていうのもあるけれど、何より村人の顔は強面だし、がたいは遥かに大きい。話っていうほどの会話はできていないけど、コニュニケーションをとってみると、陽気で優しい人ばかり。第一印象で決めて申し訳ない。それだけで村のことが好きになった。　海外に来て毎回思うのが言語について。話すことができなくてもなんとかなるけど、実際なんとかしかならない。話すことができればもっと深い話とかできたのではないかと思ってしまう。特にホームステイが始まると強く感じた。

キャンプ中に悩むこともあった。村での生活が中盤くらいになると、生活に慣れてしまって変化を求めるようになってしまった。毎日のワークもなにか物足りないような感覚になっていた。今思うと自分自身、村に何のために行っているのか本来の目的を見失っていたと思える。それでもその時は本当に悩んでいた。キャンプも終盤になりホームステイがはじまった。私のホームステイ先はワーク地から５分くらい歩かなければならない。その間に多くの村人とすれ違い挨拶する。終盤なので挨拶も当たり前のように交わす。そこでやっと気がついた。当たり前になっていることに。最初のころは知らない地で非日常のような生活を送っていた。しかし、時間が経つにつれいつの間にか村での生活が当たり前に思えるくらいに自分の中に溶け込んでいた。これがワークキャンプの良さなのかなって少し思った。日本人とかフィリピン人とか関係なく、一緒に生活しているあの感覚。すごく自分にとって大切な時間と思えた。

最後に、今回のカンソソキャンプのメインプロジェクトとなるフットブリッジの大部分が無事に完成してよかったです。何よりも村人が完成に喜んでくれたことに僕もうれしく思いました。これから先、村人たちの生活が少しでもいい方向変わったり、僕たち日本人と出会ったことで少しでも日本に興味を持ってくれたりすれば、あの橋はすごく大きな架け橋になるのではないかと思います。

レイテ島をはじめ多くの被災地が少しでも早く復興することを心より願っています。

・あやこ

私のこのキャンプでの目標は、何か自分にとってプラスになることを得てくることだった。もともと大学に行ったら、大学生としてしか体験できないようなことをしてみたいと思っていたので、一時台風の災害を受けて中止が懸念されたこともあったが、今回のキャンプに参加できることになったのはとてもうれしかった。人見知りだし、虫は苦手だし、病気や怪我はこわいし、台風の影響でどういう状況の中で過ごすことになるのかもよくわからなかったし…不安はもちろんあったが、以前キャンプに参加した先輩方の写真を見たり話を聞いていたおかげか、それらが楽しみを上回ることはなかった。

フィリピンに到着してからは、想像していた以上に本当に毎日が楽しくて充実していた。不安だったリーゴもトイレもはじめは抵抗があったが一晩で慣れたし、ご飯もおいしくて朝昼晩毎回おかわりしていた。私ここで生活していけるかもって思うくらいカンソソ村での生活に序盤から打ち解けることができたのは自分でもびっくりした。日本が恋しくなったのは、バランガイホールに巨大なトッコとクモが現れたときの２回だけだった。現地の言葉を話すことができなくても、単語を覚えてそれを連発したり、ちょっと年齢が上がると英語で会話できたりして、コミュニケーションもかたことではあるがとることができた。特にワーク中は掛け声しながらバケツリレーしたり、パニゴロ言い合ったり、村人と２人でサックを運んだりして、村人と一緒になってワークができたと思うし、その分完成したときの達成感は大きかった。正直、はじめはワークするときに誰か日本人と一緒にいないと不安だった。初対面のタタイやナナイが毎日ワークに来ていてが、現地の言葉で話しかけられるのがこわくて交流することを避けてしまっていたのかもしれない。するとその後のある日の MTG で、ワークリーダーの美咲が「せっかくだから皆もっとナナイ達ともお話しながらワークしよう、私も頑張って話しかけてるから！」と言ったのを聞いて、次の日から私も話しかけてみようと思った。一緒にサックに石を入れていたナナイに「カポイ？」と聞いてみると、現地の言葉で返事されたので「ワカサボ」って笑いながら言ったら、ナナイも「オーノー」って笑いながら返してくれた。そのとき、何をあんなに躊躇していたんだろうと思ったし、ワークを通してもっと交流したいと思った。子供たちに比べると会話できた数はだいぶ少ないけど、大人の人たちともコミュニケーションがとれるようになったことは、また一歩現地の人達と仲を深められた証だと思う。

今回、このフィリピンキャンプにこのメンバーで参加できて本当によかった。台風後で現地は大変な状況ではあったが、だからこそ見たり感じたりすることができたこともあった。特にタクロバンを訪れたときに見た倒れた木々や建物には衝撃を受けたし、復興にど

のくらい時間がかかるのかもわからなかった。キャンプを通して得たことはたくさんあったが、それらが自分にとってプラスになるか否かは今後決まっていくことだと思う。フィリピンで見たものや感じたことを大切にしてこれから生かしていきたいし、それをまたフィリピンに還元しに行きたいと思った。

最後になりますが、キャンパーのみんなをはじめとする FIWC の皆さん、ロクロクさん、ダディドドン、カンソソ村のみんな…たくさんの人のおかげでキャンプに参加でき、無事終えて帰ってくることができました。そしてフィリピンを大好きになることができました。本当にありがとうございました！

・ひーちゃん

私がこのキャンプに行くことを決めたのは、先発が出発する三週間前くらい。あやこに誘ってもらったとき、単純に楽しそうって思ったのは確かだけど、私はもともとそんなにアクティブな人間じゃないから、参加するかめちゃくちゃ迷った。今まで私は何かを選択するとき、何事もラクな方や逃げ道を選んできたから、このキャンプをやりきる自信がなかったんだと思う。参加を決める前にキャンプの話をきかせてくれるっていって会ったのが、あきお。なぜだかわからないけれど、あきおのふわふわした話をきいて、私はキャンプの参加を決めたらしい。(笑)参加を決めてからも不安なことはたくさんあった。なかでも私が一番不安だったのは、他のキャンパーと親しくなれるのかということ。自分が出国するまでにミーティングに参加できたのは、たったの二回。あやこ以外、みんな他の大学の先輩だったから、出国前まで打ち解けきれずにいた。たぶんみんなもこんな私に少し不安があったんじゃないかと思う。そしてそのまま出国の日をむかえた。初めての海外ということもあり、その日はとにかく緊張していたのを覚えている。後発のしゅんや、ゆーすけ、あやこと飛行機に乗ったら、私の両隣はしゅんやとゆーすけだった。試練は意外にも早くおとずれてしまった。何か話さなきゃって焦った。どうしようかと思った。だけど、こんな焦り、全く必要なかった。思っていたよりスムーズに会話ができたからだ。しゅんやとゆーすけの話しやすい雰囲気に、私は本当に感謝した。フィリピンに着くころにはすっかり打ち解けていたと思う。村に着いて、先発の四人に会ったときも、そのままの流れで話すことができた。ぐっさんだけはほんの数時間しか関われなかったから、ぐっさんと親しくなるのがこれからの課題。(笑)

フィリピンでの生活は思った以上に快適だった。ごはんはおいしいし、リーゴは気持ちいい！！暑いのは苦手だったけど、とても健康的な生活をおくることができた。子どもたちが元気過ぎてついていけなくなりながらも、走ったり、騒いだり、楽しい時間もたくさんあった。
今回、フィリピンキャンプに参加することで、少しでも自分を変えることができたらと思っていたが、キャンプを終えた今、正直何か変わったかどうか、よくわからない。だけど、得られたもの、初めて感じたことはとてもたくさんあった。この経験をどう活かしていけるのかはまだわからないけど、大学一年生の春休みにこんな経験ができたことは、本当によかったと思う。

＜参加メンバー＞

工藤　星授（九州大３年）：リーダー
陣内　美咲（西南大３年）：ワークリーダー・副リーダー
　　記録・ホームステイ
沖野　隼也（九州大４年）：総合サポーター
伊藤　悠介（九州大３年）：KP・保健
山口　航平（九州大３年）：総合サポーター
中村　聡志（西南大３年）：記録・ホームステイ
江原　文香（九州大３年）：会計
北島　綾子（九州大２年）：イベント
熊野　仁美（福岡大２年）：イベント
東郷　瑛　(福岡大３年)　：国内係